

舟入川プロジェクト FUNAIRI River Project

辻本一英*・鍛冶田園子・吉良有可・増本早百合・重山陽一郎**

By Kazuhide TSUJIMOTO, Sonoko KAJITA, Yuuka KIRA,
Sayuri MASUMOTO and Yoichiro SHIGEYAMA

1. はじめに

舟入川プロジェクトは、高知県香美郡土佐山田町にある山田堰から高知市葛島の国分川との合流地点へと流れる舟入川と、その支流上井川・中井川の3河川を中心とする河川の景観デザインをおこなうものである。川とは本来、人々が水と親しめる絶好の場所であり、また人と人とのコミュニケーションの場の1つである。実際に20年ほど前までは、子供たちが舟入川に入り遊ぶ姿が当然のように見受けられた。しかし現在、子供どころか誰も寄り付かない川となり、川沿いを歩くことさえも困難な状態になっている。このプロジェクトでは、川の存在をアピールし、人々に川に興味を持たせ、そして川に人々を集める事をコンセプトに掲げ、魅力ある河川の景観デザインに取り組んだ。

2. 舟入川の歴史

舟入川は万治3年(1660)、土佐藩の家老、野中兼山(1615-1663)によって整備された。これは物部川に建設された山田堰から始まり、古い用水路の調整と拡大によって建設されたものである。またその支流として、中井川が寛永16年(1639)に、上井川が天保2年(1645)に建設され、これら三河川は物部川右岸の広い面積の田畑を潤すこととなった。また、舟入川は、物部川上流の物資を高知城下へ送り、城下町より物資を逆送するという水上輸送としての役割をも担っていた。水上輸送の役割は、その

後途絶えてしまったが、灌漑用水としての役割は現在まで続いている。その過程で、度重なる改修を受けてきたものと思われるが、1998年には集中豪雨により、舟入川・国分川が氾濫し、高知市東部の広い範囲が水没したため、大規模な河川改修工事が現在もおこなわれている。

3. コンセプト

舟入川は上流では川幅が狭く、密集した茂みに隠れており、下流ではコンクリートの壁に囲まれた排水路となっている。市民生活との直接的な関わりもないため、舟入川は忘れられた存在となっている。このような状況を改め、市民に強くアピールするような魅力ある河川とするため、以下のコンセプトをかかげる。

(1) 計画レベルのコンセプト

(a) 川沿いの歩行者軸の確立

現在、高知市から土佐山田町方面に向かう交通動線はJR、土佐電鉄、大津バイパス、国道55号線(南国バイパス)、国道195号線があげられるが、大部分の人は自動車を利用しており、朝夕の混雑が問題となっている。そのため渋滞の緩和策として、パークアンドライドなどの方法が試みられている。しかし、自転車の移動については特に考えられていない。現状の道は自動車優先にデザインされており、歩行者・自転車では、快適に通行する事ができない。そこでこのプロジェクトでは、高知県の東西を結ぶ歩行者または自転車のための新しい軸を舟入川に沿ってつくることで、歩行者・自転車が安全に気持ちよく東西に移動できる空間をつくる。

キーワード：景観デザイン、親水、河川、公園・緑地、舟入川、野中兼山、山田堰

*学生会員 高知工科大学大学院工学研究科

**正会員 高知工科大学大学院工学研究科 助教授

〒782-8502 香美郡土佐山田町宮ノ口185

TEL 0887-53-1111 FAX 0887-53-2000

(b) 川で結ばれた生活空間の形成

昔、船が交通機関に利用されていた時代には、川沿いに生活空間がもうけられていたが、現在は自動車の普及により道路沿いに生活空間が集中している。川の存在をアピールするには、川に面した場所に生活とかかわりの深い空間を作り出す必要がある。川と道路が交わる場所、川沿いの住宅地、川に面した公共施設などは、川をアピールするのに適した場所である。このような場所を魅力的な空間として構成し、またそれらを川沿いの歩行者・自転車動線で結びつけることによって、川沿いの空間全体の価値が高くなると思われる。

(2) 設計レベルのコンセプト

(a) 川の水が見える空間のデザイン

上記の川沿いの空間デザインにおいては、堰の落水や、広々とした水の流れなどの眺めをうまく取り込むことによって、川の水を、まちかに見ることのできる空間をデザインする。また川だけでなく、その周囲の建築や、公園・緑地も含めて、多くの人が集まるような魅力的な空間をデザインする。

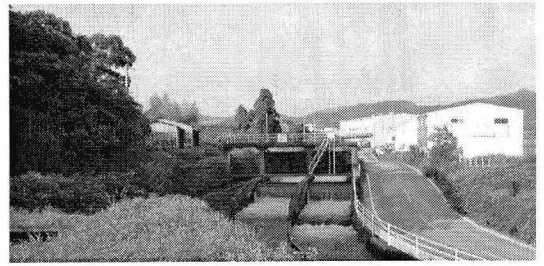


写真 3-1 上流 (右側より舟入川、中井川、上井川)



写真 3-2 中流 (舟入川)

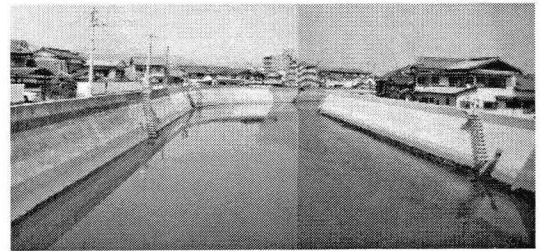


写真 3-3 下流 (舟入川)

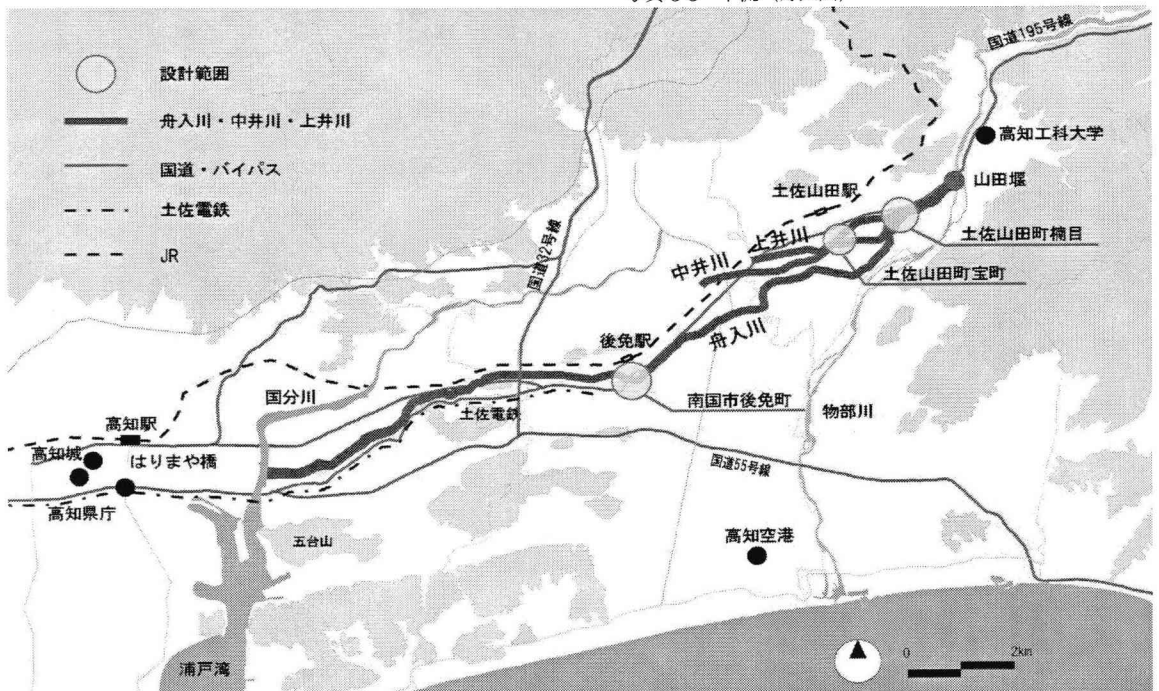


図 1 全体平面図

(b) 水に触れるための空間のデザイン

最近の子供たちが川で遊ばなくなった理由として、川岸に遊べる空間が無くなったという事が大きな要因として上げられる。川の風景を眺めるだけでなく、水に触れることができ、川で遊べる親水空間をつくる。

4. 河川の景観デザイン

(1) 土佐山田町楠目

設計範囲の山田分水付近は、物部川の河岸段丘に位置し、静かな田園地帯である。ここは物部川からの1本の川が上井・中井・舟入川の三河川へと移行する分岐地点であり、河川間の距離も近く、水位差もある非常に魅力的な場所である。また楠目小学校、楠目保育園という子供の集まる施設が隣接している。そのためこの場所は、川の存在を高め、川を表舞台にするのに都合が良い場所である。

まず小学校から親水公園に直接アクセスが可能

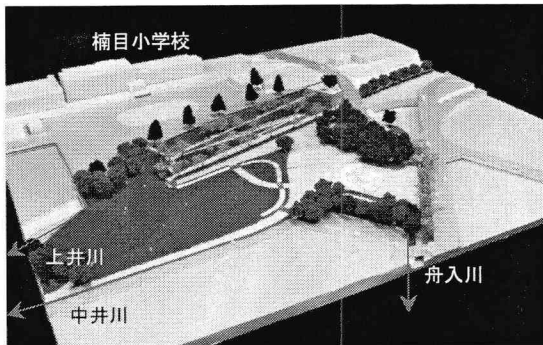


写真 4-2-1

写真右上から1本の川が3つに分かれて、左下方向に流れている。小学校は段丘の上にあり、上井川・中井川・舟入川の順に水位が下がっている。



写真 4-1-2

三河川の水位差を活用して、水を流し子供の遊び場をつつた。

となるように、一体的で境界の無いデザインをおこなった。そして三河川の水位差を活用した子供の遊び場や、地形の高低差を利用した芝の斜面(滑り台)をつくり、緑と川の調和する親水公園をデザインした。また、そこに川があることを強く印象付ける事の出来る、車から見える大規模な滝や、身障者にも配慮した桜並木のスロープなどのデザインも行なった。(写真 4-1-1、4-1-2)

(2) 土佐山田町宝町

設計範囲である県営住宅土佐山田団地は上井川と中井川に挟まれた住宅地である。この住宅地は最大高低差 9m という特殊な傾斜地形である。しかし現在その特性を活かしておらず、平地と同じ建物が建っており、住宅地と川は無関係な状態である。自然や人がふれあう場所として多くの人が集まる水辺空間を持つ魅力的な斜面建築を目指した。

まず住宅地の中央部に川の高低差を活かした親水空間をつくり、子供の遊び場・地域住民の交流場とした。ここは、外部からの来訪者などとの多面的



写真 4-2-1

高低差のある地形を活用し、団地を斜面建築で構成する。屋上緑化などを施し、緑豊かな団地となる。



写真 4-2-2

二河川の水位差を活用し、住宅地中央部に河川間をつなぐ親水空間をつくり、コミュニケーションの場とした。

なコミュニケーションの場所にもなり得る。また屋上緑化などを組み込んだ斜面建築を提案した。北側の建物ほど高い位置にあるので住宅から南側の見晴らしがよい。また団地内に高低差があり、変化に富んだ緑豊かな屋外空間をつくりだし、全体としてみながすがしく、気持ちの良い住宅地をデザインした。

(写真 4-2-1、4-2-2)

(3) 南国市後免

設計範囲である南国市後免町は市の中心市街地であり現在、舟入川を含めた地域に市街地再開発事業が進められている。しかし、現状の舟入川は、そこに川が流れていることすら気付かないほど存在感がない。再開発事業でも舟入川周辺を親水空間にしようという整備計画はあるが、商業施設や公共公益施設等の計画に重点が置かれ、川を意識した計画とは言えない。これでは川の存在はますます薄くなる一方である。この現状を解決するには、まず川の存在を人々にアピールしなければならない。周囲の住

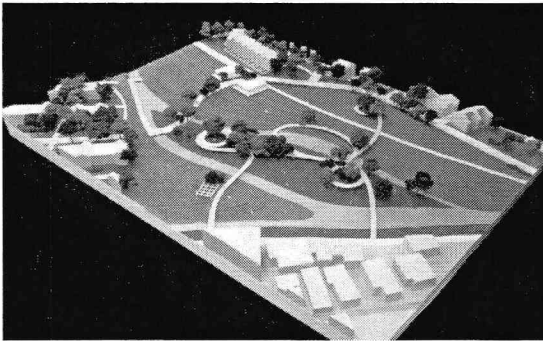


写真 4-3-1

舟入川の川幅を広げ、川岸を芝生の広場にすることによって広々とした気持ちの良い空間となる。また中央部の巨大遊具が広い空間に変化を与えている。

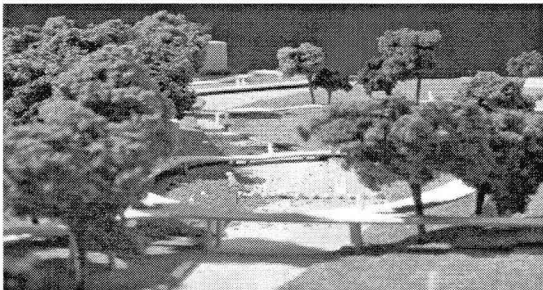


写真 4-3-2

緩傾斜の護岸、砂利の河床、多くの木々、芝生の広場、そして巨大遊具がマッチし子供達にとって気持ちの良い遊び空間ができる。

民や子供たちに川に興味を持ってもらうことが大切である。

まず川幅を広げ、護岸を緩傾斜にし、広々とした芝生の広場をつくった。そして川底をコンクリート三面張りから砂利にし、本来の川の姿に戻した。また子供達の遊びの空間として舟入川に分流をつくり、2本の川をまたぐ巨大遊具を設置した。大人の空間としてオープンスペースやカフェテラスなども設け川を眺めることのできる空間を多くとった。

(写真 4-3-1、4-3-2)

5. 今後の課題

今回のデザインでは、生態系、水質改善、水利権、水理学などをあまり考慮していない。今後、これらをふまえる必要がある。また今回は、上井川・中井川そして全長 12km に及ぶ、舟入川のごく一部分を設計したにすぎない。そこで我々はこのプロジェクトを引き続きおこない、歴史的に重要であるこの3河川が灌漑用水路としての機能目的だけで存在している川、または川の一部分だけが美しい川としてでなく「高知県に上井・中井・舟入川あり」とうたわれ、人々の心に残るような美しい川の設計を続ける予定である。

6. 参考文献

- 1) 山崎修：土佐を歩く 一風景は語る一上、飛鳥出版堂、1994
- 2) 山崎修：土佐を歩く 一風景は語る一下、飛鳥出版堂、1997
- 3) 平尾道雄：野中兼山とその時代、高知県文教協会、1970
- 4) 土佐山田町史編集委員会：土佐山田町史、土佐山田町教育委員会、1979、p 354・p 358 p 632・p 363